

皆さん、こんにちは。

会報20号、今回も私、濱野がセブ島からお届けします。

今この会報を書き出している時期、セブの学校は丁度、中間休み（Sem Break）前にあたり、これから大学では前期期末試験、小中高では二学期（1年四学期制）の同じく期末試験前のタイミングになります。これらの試験が終わると学校は2週間ほどのお休みに入り、11月初めの万聖節（10月31日のハロウィーンに死者があの世界から帰ってきて、墓場に集まるので11月1日には日本のお盆宜しく、お墓参りをする行事）をもって休暇が終わるというイメージです。



また、私の方はNPO法人プルメリアが9月末をもって前年度が終了した事を受けて、決算報告書を作成しているところです。

1. 決算内容より

今回の決算は、ほぼ前々年度並みで、実は、今年度は、少しだけ資金の取り回しが楽になりそうな見込みです。今回、こうして、ここで決算内容について触れておりますのは、2014年以降、ホームページ上での決算公開をしてなかった事に、公開の要望を頂いた為です。

以前にも会報の中で触れておりましたが、公開しない理由は決算内容が「赤字」、または、損益なしという運営的にギリギリのものだったので、公開することによって、逆にこれから支援をしたいと考えておられる方々に不安を抱かせてしまうかも知れないとした「運営側の不安」が働いた事によります。

勿論、毎年の決算は適正に行い、法人を管轄する官庁には、その収支報告をし承認されて来ている訳ですが、情報公開をしない事で、決算及び収支報告をしていないのでは？という誤解をされる方もあったようで、それは逆に好ましくない今年以降は原則公開の方向を取ろう…という方向でプルメリア役員会の総意を得ました。



正直なお話として、元来こうした集計は少なくとも月単位ではしなければならないところが、出来るのは現状では私自身しかない中で、私自身の生活維持のため週5~6日の一般企業での勤務もあって、中々事務処理のための時間取りが思うようになっていないので、この時期は一般企業での仕事を少しお休みをして（パート扱いなので、その辺りは比較的柔軟に出来ます）何とか、決算事務等の書類作成作業のために時間を割いているところです。

勿論、お金のやり取りについては、その都度、受取票に署名を頂いておりますので、その集計をするだけの事なのですが、それが一定以上に溜まってしまうと、その処理にはそれなりの時間がかかってしまうのです。

さて、冒頭で、‘この先、少しだけ資金の取り回しが楽になりそうな見込み’と申しあげましたが、これは、3月末での大学卒業生と併せて、今回、大学前期（10月末まで）で卒業をする大学生も数名いるため、負担が減りつつある事がある理由ですが、これは企業スポンサー様からの支援が当分、このまま続けば何とかかなると言うことであり、もし支援金の減額他の措置が取られた場合には、また元の通りか、下手をすれば、活動の存続そのものが難しくなる可能性もありますので備えは可能な限りして維持していきたいところです。

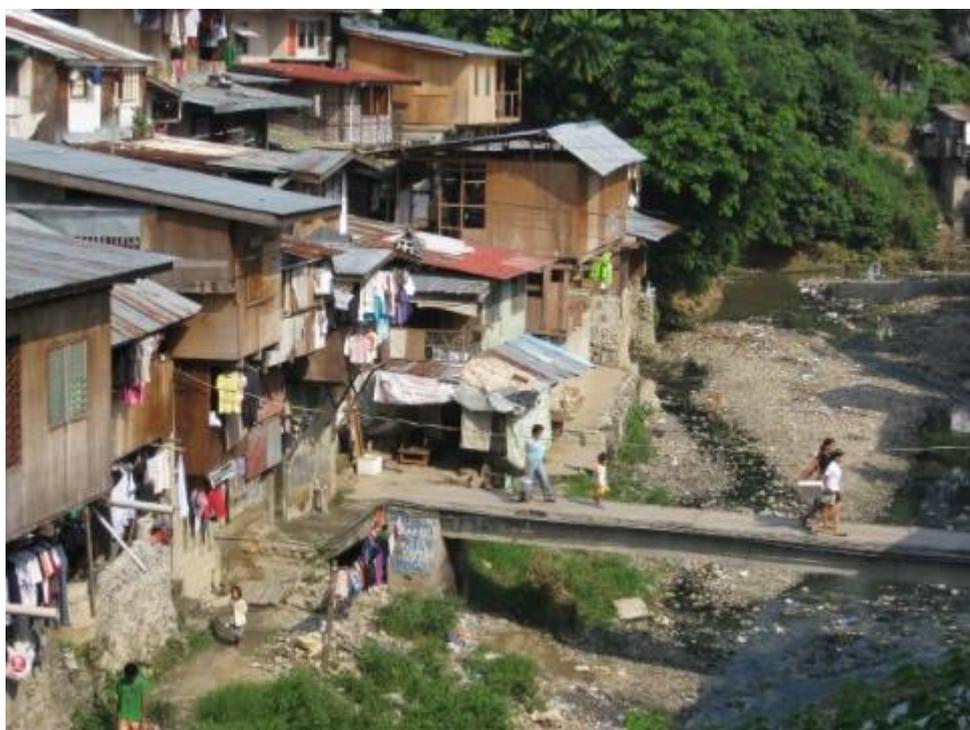
2. セブの現状

実を言いますと、この会報を書き出すに当たり、以前の会報の内容を見直してみました。全て私自身が書いたものですが、10年以上前のものは、自身でも内容を覚えておらず、変な話ですが、非常に新鮮に感じました。勿論、書いている内容は、ちゃんと自身で検証したものばかりで、今見ても間違いないのですが、感想として、ここセブの状況は、一部は激変し、しかし、根底にあるものは、実は余り変わっていないのかな…というところです。



特に激変しているのは、物価であり、10年前の内容でも、更にその前10年弱の間に大幅に物価が上昇している旨、述べているのですが、そこからの物価上昇もやはり、同じことで、大雑把に年率8%程度伸びているので、10年経って約2倍になっているのが現状です。不

不思議な事に、ガソリン他、燃料の価格はさほど上がっていないのですが、顕著に上昇しているのが食品及び、地価です。それに対して、最低賃金の伸びは過去 10 年で、50%弱しかないので、結果として、プルメリアが支援する奨学生たちが属する貧困層の生活がより一層、圧迫されているというのが現状と言えます。



そうした背景の中で、最近、ここで暮らす日本人の間でよく言われる事には、物価が安いことを期待してセブへ来たら、実は、日本の物価とそんなに変わらないし、場合によっては高く付いているのではないか言う事です。

そして、この事は、特筆すべき事なので、次章に別途、書きますが、10 年ほど前には、マニラの富裕層が首都圏の混雑を嫌って、セブへ移住する流れが確実にあったのですが、それが行き過ぎ、更には、中間層の所得の伸びとカーローンの金利が低くなった事が相俟って、車が大量の溢れ出し、最近では、セブの朝夕のラッシュたるや、凄まじく、特に過去 4～5 年で、この町は、非常に暮らしづらくなったと感じます。

3. 変わらぬ道路環境、増える自家用車

このところセブの交通事情は急速に悪化しております。そもそもの原因は、日本で言うところの公共交通機関がそもそも未発達の状態、鉄道を初めとする定時運行する陸上交通手段（労働者他の大量輸送手段）がいまだに存在しない事に端を発しています。

そして、それに輪をかけるのが、熱帯地方の風物詩とも言えるゲリラ豪雨です。これによって、朝夕のラッシュ時に道路が冠水したりすると、最早、交通は麻痺状態となり、例えば、朝方の空いている時間帯であれば、セブ市の中心部からマクタン島の工業団地（セブマクタン国際空港近く）まで 30 分程で行けるのが、豪雨時には私の経験した中では最長 5 時間と言うこともありました。



こうなってしまうと、実は歩いた方が早いのですが、道路があちこち冠水している上、雨脚が速くなると、傘もほとんど役に立たない為に、車の外へ出られず、いわゆる、缶詰状態になってしまうから、どうしようもないのです。

こうした中で、公共交通機関に準ずるものとして、ジプニーやタクシーの存在がありますが、こうした事態になると、絶望的に捕まらず、何処かに何時間も足止めされる結果になります。

そうした事を嫌って、自家用車やバイクを個人所有する人が増えて来ている訳ですが、道路環境（道路面積）が変わらない中で、車の台数が増えれば、結果、道路が溢れるため、問題の解決になるどころか、悪化の一途をたどるしかないのです。

また、悪天候により道路が冠水するのも必ずしも天災とは言えず、土木工事技術の稚拙さがその裏側にはあります。実を言えば、セブ市とお隣のマンダウエ市の境の辺りは、以前から水害が酷くて、彼是 5 年ほど前から 2 年前の足掛け 3 年ほど、大規模な下水工事が施工されていました。

しかし、私は、素人目に見ても、その工事の進行が遅く、場当たりの対応（即ち、体系的ではない対応）しか、していないに見えて、思ったのは、土管を埋設している間に泥やゴミが流れ込んで、完成した際には、既に詰まって使えない様相になるのではないかと、言う事でした。

果たして、これだけの大掛かりな工事をしたにも関わらず、状況は以前とほとんど変わらず、一定の雨量を超えると、主要幹線道路が冠水して、交通が遮断され、都市機能が停止する…とした様相が相変わらずなのです。

また、個々のドライバーの技術・知識もお世辞にも高いとは言えず、実態として、路上での優先順位とか、マナーとか法規とかが周知徹底されていないのも（即ち教育不足）、そうした混乱に輪をかけています。



4. 国家のレベル（教育のアリカタとは？）

前章の中で、‘教育不足’ということを書きました。

実を言えば、先進国と発展途上国を分ける決定的な要素が‘それ’ではないかと、最近、そうした思いを強くしています。

以前より、そもそも植民地と言うのは宗主国が現地民を都合よく（奴隷として）扱う為の教育はあっても、自立して物事を考え痛みを痛みとして捉えるセンスは邪魔であったので、教育の内容そのものが先進国のそれとは全く違う…そのような事を述べて参りました。

例えば、宗主国の支配者が、自分たちがより都合よく立ち回るために、見かけ、現地民のためを装って、何かの仕掛けをしようとした時に、本当に‘切れる’人は、それを見抜いてしまうので、支配者は困るのです。

それゆえ、土木工事（大きくは都市計画）なども、先ず、測量をキチンとするところ（現状を把握するところ）から始まって、どこをどう触るのか、秩序立てて地域全体を俯瞰しながら、手をつける順番、優先順位を決めねばならないと思われます。

...実は、そうした思考こそが、自立、独立にも繋がる訳ですが、歴史的に見て、植民地として国家が成立してしまったこの国では、そうしたものが入る余地が無かったと推察されます。思うに、ここフィリピンだけではなく、嘗て植民地支配を受けた国々と言うもの、熱帯性気候の国々が恐らくは大多数で、冬の無いこうした地域では、元々、先に備える、思考をめぐらせ、的確に準備をする、さもなくば死ぬ…こうした背景が無かったのに、更に、植民地支配によって、奴隷的な洗脳（教育）を受けた結果、現代において、より、それが深刻化したと言うのが真実なのでしょう。



5. 教育の現場の実態

さて、私も、ここセブでの教育支援 NGO 活動に携わって、20 年近くを経過し、この公立学校の先生たち、生徒（奨学生）たちとも交流を深めて来ました。

そして、今ここで生まれ育った私の娘も小学校 6 年生となり、近所の小中高一環の私立学校に行かせている中、この国の教育の実態というものについて前章までに述べました事柄等々、痛切に感じる場所があります。やはり…教育の質と言うことになると、日本を初めとする先進国レベルの教育を求めたとき、それは、この国では支配階層の教育レベルを指すことになって、実を言えば、日本の普通の公立校でのクオリティに何とか合致するところを探すと、最早、それは、インターナショナルスクールのレベルとなり、年間の授業料そのものだけで、日本円換算で 100 万円単位のコストがかかって来ます。

つまり、そうした質の面の観点からすれば、やはり、先進国と途上国にはまだまだ埋められないギャップがあるのが実情で、逆に言えば、日本の公立校で、そのレベルの教育を受けられるのは、ある種、先進国の先進国たる所以かも知れないのです。ここで生活しておりますと、二章でも申し上げましたが、いたるところでそうした事を痛感する場面があり、ここでの物価水準は、既に日本と変わらないか、質の面で同等を求めるなら、ここセブの方が割高になると言うのは、この辺りの事情から来るのです。



6. この国での教育支援の意義

前章のようなお話をしますと、それではプルメリアが、ここで試している教育支援に意味があるのかと疑問を持たれる向きもあるかと思いますが、私は決して意味がない事ではないと考えております。

その根拠は、これまでに支援した奨学生の中には看護師の資格をとってニュージーランドで働くチャンスを得たジェドリー君が良い例で、今年 30 歳になった彼は現在、同国の看護大学のインストラクターを務めるところまでスキルアップしており、彼らの水準は先進国のレベルにも劣らないと言う事を証明しているからです。

勿論、彼も小学校から中学校までは公立校に通っておりまして、中学校を卒業する段には主席であったため、それ以降は私立校の特待生の待遇を得ましたが、これは旧学制の下でのお話で先進国の尺度でみると彼のここでの最終学歴は短大レベルなのです。

それでも、先進国で大学のインストラクターを勤めるレベルに現在達しているのですから、これは本当に凄い事（すごい努力）だと思います。今でも彼とは時折、インターネットを介して交流がありますが、昔から彼は能力が高いだけではなく基礎の部分を重視して、本当に自分のものにしてきた…そういう印象が強いのです。

そうした才能ある子ども達に基礎教育をちゃんと受けられる機会を提供すれば、その先に広がる可能性は無限であるかも知れないのです。皆が皆そうなるとは言えませんが、この方針が、これまでプルメリアが取り組んできた選抜制の意義なのです。

今年度からは、少し資金的な余裕がもてそうな見通しがあります。そうした中で、私も、その機会を捉えて、今後、少しでも多くの時間を奨学生たちとの面談や教育面のサポートの時間を増やして、この活動を続けて行きたいと思っております。



NGOプルメリア代表 濱野